

【グループ構成員の実践内容】

相沢 友紀 東京都立墨東特別支援学校 肢体不自由 小学部準ずる教育課程（A 課程）1～3，5，6 年 ぼくのわたしのオリンピック・パラリンピック			
期待できる教育効果 （育成される資質）	ボランティアマインド 日本人としての自覚と誇り	障害者理解	スポーツ志向 豊かな国際感覚
<ねらい> ・他国の人々や文化に親しむ。（第1学年、2学年） ・他国の人々や文化に親しみ、関心をもつ。（第3学年） ・他国の人々や文化について理解し、日本人としての自覚をもって国際親善につとめる。（第5学年、第6学年）			
<活動内容> ・オリンピック・パラリンピック参加国クイズ ・参加国について知っていることを発表しよう ・2020東京オリンピック・パラリンピックに向けてやりたいこと・できることを発表しよう ・「なぜオリンピック・パラリンピックをやるのだろうか？」～2020オリンピック・パラリンピックポスター動画を見てみよう ・ぼくの・わたしのオリンピック・パラリンピックポスター作り			
<生徒の様子> ・3時間扱いの活動であった。最初にオリンピック・パラリンピックの意義について考える授業で、あえて「オリンピック・パラリンピックをやらなくてもいいんじゃない？」と葛藤させる発問をしてみたところ、高学年を中心に「世界の人々とつながることが大事だから」とその意義にせまる回答を引き出すことができた。もともと本校は外国人居住者の多い地域を学区にもち、外国籍の児童生徒も少なからずいることからこのような意見も素直に出てきたのだと考える。ポスターの意味するところも考え、発表することができた。			
<考察（オリンピック・パラリンピック教育で活用できる教材、授業展開、改善点等）> ・今回は校内に掲示されている2020東京オリンピック・パラリンピック公式ポスターをそのまま活用した。ポスターデザインの意義を知る教材として、youtube にアップされている「2020東京オリンピック・パラリンピックエンブレム公式ムービー（日本語版）」をそのまま電子黒板に接続して視聴覚教材として活用した。今後、東京都教育委員会から発行されているオリンピック・パラリンピックに関する副教材や副読本を積極的に活用することが今後の課題である。			

吹越 菜央 小平市立小平第四小学校 通常学級 第5学年 「アートマイルプロジェクト」たった一つのまあるい地球～つながる空が結ぶ日本とウガンダ～			
期待できる教育効果 （育成される資質）	ボランティアマインド 日本人としての自覚と誇り	障害者理解	スポーツ志向 豊かな国際感覚
<ねらい> ・他国の小学生との交流や協働学習を通して、互いの国の文化や生活環境の違いを知ると共に、自国に誇りをもつ。 ・交流を通して異文化を知ることの楽しさに触れ、進んで自分の思いを伝えることで相互理解を深める。			
<活動内容> ①「世界一大きな授業」に参加し、より良い世界を目指して活動する子供達がいることを知り、自分にできることを考える。 ②交流国となったウガンダ共和国について調べ学習を行う。 ③外国語活動と関連させ、英語で自己紹介をし合い、互いの国の文化や生活の違いに気付く。 ④「世界がもし100人の村だったら」のワークショップを行い、世界を取り巻く課題や世界の子供達の現状を体験的に学ぶ。 ⑤日本側の大型壁画を作成する。 ⑥外国語活動と関連させ、互いの将来の夢を英語で伝え合い、世界には様々な夢をもつ同年代の子供達がいることを知る。			
<児童の様子> ・現地の民族衣装や菓子、調味料など本物を見たり触れたりすることで、ウガンダ共和国を身近に感じることで、交流国への興味・関心が高まった。 ・写真付きの自己紹介シートやビデオ交流により、互いの顔を見ることができ、交流しているという意識が高まった。 ・世界の現状を自分事として考え、自分だったら何ができるかという視点で考えることができるようになった。			
<考察（オリンピック・パラリンピック教育で活用できる教材、授業展開、改善点等）> ・<u>小学校 外国語活動と関連させた活動</u> 交流国と英語でコミュニケーションを取る機会が増え、英語を使う必然性が生まれることにより、学んだ英語が通じた体験をすることができるとともに、英語を話すことへの意欲に繋がる。 ・<u>海外の学校との直接交流</u> 年間を通じて段階を踏んで交流を深めることで、世界に目を向ける時間が増え、体験的に学ぶことができると共に、一緒に大型壁画を制作する協働学習で、世界を身近に感じ、世界の多様性を受け入れる力を身につけることができる。			

安達 友紀 立川市立松中小学校 第2学年 単元名：せかいのなかまとわたしたち	
期待できる教育効果 （育成される資質）	ボランティアマインド 障害者理解 スポーツ志向 日本人としての自覚と誇り 豊かな国際感覚
<ねらい> ・モンゴルを知ることを通して、世界の様々な国について興味・関心をもつ。（関心・意欲・態度） ・モンゴルの文化や生活を通して、世界には様々な国があることを知り、その違いや共通点について気づく。（知識・理解） ・モンゴルと日本との関わりについて知り、自分たちにできることについて考える。（思考・判断・表現）	
<活動内容>（全5時間） （第1・2時）・モンゴルクイズを行い、モンゴルの基本的な情報や子どもたちの学校生活、日常生活について知る。 ・日本との違いや共通点について、まとめる。 （第3時） ・モンゴルの抱える諸問題について知る。 ・日本がモンゴルに支援をしていることを知る。 ・モンゴルで活躍している日本人について紹介する。 （第4時） ・モンゴルの写真を1枚選び、見出しやコメントを入れてポスターを作成する。 （第5時） ・友達と交流し合い、ポスターを発表する。	
<生徒の様子> ・全体を通して児童の反応はとてもよく、興味をもって意欲的に学習に取り組むことができた。 ・休み時間にもモンゴルにふれたり、図書の時間に外国に関する本を読んだりする児童が増えた。 ・モンゴルが抱える課題を提示する場面で、児童の関心が下がるのではないかと予想していたが、予想に反して関心が高まった児童が多かった。その理由としては、日本人や日本の機関が支援に関わっていることを知り、「自分も助けたい」「日本の技術はすごい」など前向きな気持ちをもてたからだと思われる。	
<考察（オリンピック・パラリンピック教育で活用できる教材、授業展開、改善点等）> ・世界の国々について知る活動を通して、「豊かな国際感覚」を育てることができた。東京都のオリパラ教育として行っている「世界ともだちプロジェクト」に関連づけて活動することでもできる。 ・開発途上国での日本の支援や活躍している日本人について紹介したことで、低学年の児童でも「日本人としての自覚と誇り」を感じることができた。ただ学年の発達段階を踏まえた表現の工夫が必要である。（できるだけ平易な言葉を使用する、写真や映像など視覚的教材を使用する、など。）	

大和田 章 東京都立町田の丘学園 知的障害 中学部 「モンゴルを知ろう」	
期待できる教育効果 （育成される資質）	ボランティアマインド 障害者理解 スポーツ志向 日本人としての自覚と誇り 豊かな国際感覚
<ねらい> ・モンゴルを学ぶことで、生活・文化・習慣など世界の多様性を学ぶ。 ・モンゴルを学ぶことで、生活・文化・習慣など世界と自分はつながっていることを学ぶ。	
<活動内容> ①モンゴルの地図上の位置の確認。日本とモンゴルの国旗の紹介。日本の相撲の紹介とモンゴル相撲の体験。モンゴルのお菓子とお茶を飲食する体験。 ②授業で喫茶店を開くときの内装として、モンゴルの空、ゲルのミニチュアを製作する。 ③授業で喫茶店をしたときに、お客さんにモンゴル茶を提供する。モンゴル茶を提供することで、お客さんにモンゴルの食文化を理解してもらう。 ④文化祭でモンゴル劇をする。文化祭にいらしたお客さんにモンゴルの様子を伝えることで、モンゴルの生活を理解してもらう。 ⑤モンゴルの民族楽器の馬頭琴の演奏会。馬頭琴と三味線の演奏を聴く体験。モンゴルの民族服を試着する体験。 ⑥モンゴルの食べ物、ホーショーローを作る体験。 ⑦これまでの授業の振り返りを、日本とモンゴルを比較しながらする。	
<生徒の様子> ・モンゴル茶、モンゴルのお菓子という食べ物には興味を示し、食べる生徒が多かった。味覚が合わない生徒が多く、残した生徒が大勢いた。モンゴルの食文化を体験できた。 ・モンゴルの空を描いたり、住居のミニチュアを作ることで、映像（視聴覚）の受身的な活動ではなく、体を使った能動的な活動をしていた。 ・モンゴル劇は、生徒は役割を理解し、舞台上で自分の役を演じていた。 ・演奏会は、馬頭琴や三味線が生徒の芸術的興味を喚起し、立ちあがって感動を表現する生徒もいた。 ・ホーショーローは生徒の味覚にあったらしく、残さず食べる生徒がほとんどであった。モンゴルの食文化を体験していた。	
<考察（オリンピック・パラリンピック教育で活用できる教材、授業展開、改善点等）> ・生徒たちがどのぐらいモンゴルという国を日本とは異なる国という理解をしたかを測ることは難しい。しかし、日常生活とは異なる体験をしたことで、異文化を受け入れる素地はできたのではないかと考える。また、日本とモンゴルをはっきり異なる国であると理解した生徒もいる。その生徒たちが、今後はモンゴルだけではなく、他の国にも関心を広げてくれことを期待している。	

森 裕紀子 千葉県立桜が丘特別支援学校 肢体不自由 高等部2年生B課程 「食を通して外国の生活を知ろう」	
期待できる教育効果 (育成される資質)	ボランティアマインド 障害者理解 スポーツ志向 日本人としての自覚と誇り 豊かな国際感覚
<ねらい> ・「食」を通して異文化に触れ、異文化を知ることによって新しいことを知る楽しみを感じることができる。 ・フोटランゲージを通して、様々なものの捉え方を知ったり、思ったことを人に伝えることや人の考えを聞くことの大切さを体感したりすることができる。	
<活動内容> ・「外国の人との交流」…外国の方とコミュニケーションをとる。外国の「食」について知る。 ・「フोटランゲージ」…1枚の写真をみて気づいたことを共有。3枚の写真を見て「一緒に暮らしてみたい順」に並べ、理由を考え、発表。世界の様々な国の写真を見てどこの国の写真かを考える。 ・「フィンランド料理を作ろう」…担任が今年度研修で訪問したフィンランドについて学習し、フィンランドミートボールを作り、食べ、日本のミートボールと比較する。	
<生徒の様子> ・外国籍の大学生との授業では、積極的に大学生とコミュニケーションを取る様子が見られた。 ・フोटランゲージでは、指さしたり書き出したりして気が付いたことを意欲的に伝えることができた。 ・世界の様々な国の写真を見て、自分の家や食事と比較して違いや同じに気づき発表することができた。 ・調理実習では、日本のミートボールと違うところに気づき、発表することができた。 ・今まで見たことなかった国々の様子に対して、興味関心が高いと感じた。	
<考察（オリンピック・パラリンピック教育で活用できる教材、授業展開、改善点等）> ・フोटランゲージや調理実習など、視覚的にわかりやすい教材や具体物を用いることで、遠い外国を身近に感じることができるとともに、自分の生活や「日本」と外国を比較しやすくなると考える。それらのことが、日本や世界の国々への理解へとつながり、オリンピックやパラリンピックへの理解やそれぞれの立場での参加へとつながるであろう。	

鈴木優成 千葉県立東金特別支援学校 知的障害 中学部1～3年 題材名：キャップを集めてリサイクルし、世界の子どもたちのためにワクチンを送ろう	
期待できる教育効果 (育成される資質)	ボランティアマインド 障害者理解 スポーツ志向 日本人としての自覚と誇り 豊かな国際感覚
<ねらい> ・社会に貢献しようという意欲や他者を思いやる気持ちをもつとともに自己肯定感を高めることができる。 ・リサイクル対価を寄付することが目的であることを知り、地域のボランティアと一緒にエコキャップ運動に取り組むことができる。 ・友達や地域のボランティアの方と一緒にペットボトルキャップの回収、分別、シールはがしができる。	
<活動内容> ・中学部生徒全員（32名）で地域のボランティアの方と一緒に、エコキャップ運動（ペットボトルキャップの回収、分別、リサイクル）に年6回取り組み、リサイクル対価をNPO法人「世界の子どもにワクチンを」日本委員会（JC V）に寄付している。 ・友達と一緒に「エコキャップ運動の歌」や「エコキャップクイズ」を通して、活動について学習した。 ・全校集会で、地域の老人会や小学部、高等部の児童生徒にエコキャップ活動についての発表をした。 ・「千葉県ライトブルー少年賞」を受賞し、千葉県庁での表彰式に参加した。	
<生徒の様子> ・エコキャップ運動の流れや目的を繰り返し学習したことで、自分たちが社会の課題のために活動できることを知り、意欲的に活動に取り組む様子が見られた。 ・ボランティアの方々や友達と交流を深めながら活動に取り組むことができた。回を重ねると、自分から挨拶をしたり、落ち着いた姿で活動に参加したりすることが増えた。 ・「千葉県ライトブルー少年賞」を受賞したことで活動への意欲をさらにもつことができた。また、活動が認められたことを知り、自己肯定感を高めた様子が見られた。	
<考察（オリンピック・パラリンピック教育で活用できる教材、授業展開、改善点等）> ・社会貢献のためのボランティア参加の体験活動であり、ボランティアマインド育成のために有効であるのではないかと考える。 ・障がいのある生徒と地域の方との交流や協力・協働する授業展開であり、共生社会の実現への取り組みとなるのではないかと考える。	

【授業実践の様子】

① ②

① ②

授業実践者：相沢 友紀

～つながる空が結ぶ日本とウガンダ～

授業実践者：吹越 菜央



『エンブレムを活用した授業の様子』



『アートマイルプロジェクトで完成した壁画』

② 「モンゴルを知ろう」

授業実践者：大和田 章



『モンゴル相撲』



『馬頭琴の演奏会』

③ 「食を通して外国の生活を知ろう」

授業実践者：森 裕紀子



『フォトランゲージ』



『フィンランドについての学習』



『フィンランドミートボールを作ろう』

④ キャップを集めてリサイクルし、世界の子どもたちのためにワクチンを送ろう

授業実践者：鈴木優成



『エコキャップ集め』



『学部集会での発表の様子』

【平成２８年度の研究会実施日】

	実施日	活動内容
1	平成２８年６月１９日（日）	プロジェクト概要の共有、実践計画・年間計画の検討等について
2	平成２８年８月２８日（日）	実践状況の共有、プロジェクト紹介動画作成等について
3	平成２８年１１月２７日（日）	実践状況の共有、授業案の協議等について
4	平成２９年２月５日（日）	実践状況の共有、報告書のまとめ方等について

今年度は、研究会を４回実施しました。研究会では、実践の内容をまとめたものや授業指導案を持ち寄り、情報を共有するだけでなく、実践への助言や感想を伝え、各自の実践がより充実したものになるよう工夫しました。

【平成２８年度のまとめ】

今年度は、特別支援学校だけでなく、小学校の教諭も加わり、様々な場での様々な実践が集まりました。

国際理解教育では、外国のことを知るだけでなく、知って、日本や自分の生活と比較したり、そこから自分に何かできることはあるかと考え行動したりすることができました。

交流教育では、障害のある生徒達が地域の方々と協力して活動することで、障害者理解へとつながり、それが共生社会の構築へとつながると感じることができました。

また、特別支援学校と小学校の取組で共通していた事柄は、

- ・具体物を用いることが効果的
- ・視覚的にわかりやすいよう、動画や写真を教材に用いることが効果的
- ・調理実習や劇、壁画制作など、体験的な学習を通して世界の国々のことを学ぶことで、児童生徒の気づきを生んだり、物事や他人の意見に共感しやすくなったりし、理解がより深まる
- ・知るだけでなく、わかったことや感じたことを人に伝えたり発表したりすることが、学習をより深めるだけでなく、児童生徒同士の相互理解にもつながる

等ということです。

机上での学習と体験的な学習を組み合わせた授業を行うことで、「関心・意欲・態度」「思考・判断」「技能・表現」「知識・理解」の様々な項目を網羅できると考えます。

【平成２９年度の方向性】

２０２０年の東京オリンピック・パラリンピックを見据え、オリンピックやパラリンピックのエンブレムや動画などをより積極的に利用しつつ、児童生徒の国際感覚を磨き、世界と共に生きる一人ひとりの自覚と責任を促し、逞しく生きる人材を育成することを目指して、より先行的な実践を積んでいきます。今年度同様、体験的な学習を取り入れたり、他校や他国との交流をしたり、地域や社会とのつながりを大切にしたい取り組みを実践したりして、オリンピック・パラリンピック教育のさらなる充実を目指します。